

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊 25 年目
創刊 1989 年 Nr. 293

GEKKAN-WIEN 2013年11月号



Jacob van Schuppen Prinz Eugen von Savoyen nach der Schlacht von Belgrad am 16. August 1717, 1718 Öl auf Leinwand 146 x 119 cm
© Rijksmuseum Amsterdam Als Dauerleigabe im Belvedere, Wien



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 26



八月三〇日〜九月一日にかけて、中国ハルビン工程大学の創立六十周年記念イベントの一環として、同大学主催により原子力安全とシミュレーション技術に関する国際シンポジウムが開催された。テーマは、福



ハルビンでの国際シンポジウム

島原子力発電所事故の教訓、先進的システム解析とシミュレーションなどであった。中国・デンマーク、日本、韓国、ノルウェーの五ヶ国から八件の招待講演があり、ハルビン工程大学の博士課程の学生を中心に約六十名の聴衆が参加した。我が国からは、同大学の招聘教授を務める吉川京大名誉教授、同大学の客員教授を務める松岡宇都宮大学教授、日本原子力発電の新田顧問と筆者が講師として参加した。

筆者は吉川先生のご紹介で本シンポジウムに参加し、冒頭に「福島原子力発電所事故後のシビアアクシデント研究の展望」と題する招待講演

を行った。福島原子力発電所事故を受けて、今後の重要なシビアアクシデント研究課題について、日本原子力学会が進めている検討状況と私見を紹介するとともに、京都大学など我が国の大学で実施しているシビアアクシデント研究を紹介した。講演に対して学生や外国講師からも活発な質問があった。シンポジウムにご招待頂いたお陰で、生まれて初めてハルビンを訪問して、ハルビン工程大学関係者の知遇を得るとともに、ロシア風情緒が残る市内を少々見学できたのが嬉しいことであった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、音楽など芸術に対する支援については述べてみたい。ウィーンでは欧州随一の名門王家であるハプスブルク家が音楽と美術を愛し、その発展を支援した。特に、音楽家の出身地に關係なく良い音楽を支援したことが今日「音楽の都」と呼ばれることに繋がっている。近年は、旧国立系の音楽施設（シュターツオペー、フォルクスオーパーなど）や美術館（美術史博物館、ベルヴェデーレなど）は、国から助成金が出るばかりでなく、民間スポンサーに資金の多くを頼っている。主に日曜日に無料コンサートを開催しているペーター教会などでは、

平素の寄付以外にコンサート出席者にコンサートの寄付も募っている。総じて、スポンサー、寄付活動などが活発に行われている。

一方、京都も平安時代から文化・

芸術の中心地として、皇室や将軍らが文芸活動を支援してきた。足利義満の援助を受けた観阿弥・世阿弥親子による能楽発展の地であり、出雲阿国による歌舞伎発祥の地でもある。明治以降も、我が国二番目の大規模公立美術館として京都市立美術館が昭和八年に設立されるなど公的支援が続いた。現在の門川京都市長は、京都市立芸術大学の入学式や議会に着物で出席するなど、芸術を愛する心を持つておられる。市内有名ホテルのサロンで音楽専攻学生による無料演奏会が定期的に開催されている。また、安い値段で聴くことができる、プロの音楽家による演奏会も市内のあちこちで毎日のように開催されている。京都でもこうした公的及び民間の支援が活発である。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、大使主催の天皇陛下誕生祝賀会などで日本人学生によるコンサートや教会でのコンサートを時々聴いた。京都では、今年六月たまたま家内と訪れた国立近代美術館で京都市立芸術大学学生による無料コンサートを聴いた。この時はアンコール曲「椿姫」の「乾杯の歌」が盛り上がり、終了後にウィーンのように「ブラボー」と叫んだら学生達は大いに喜んでた。両市で貴重な音楽体験ができた幸運に感謝しつつペーター教会を描いたスケッチを掲載させていた。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長

